

新

歌人群像

小中英之

● ことばに懸けた歌人

● 中地俊夫 ●



小中英之は歌人になるために生まれてきたような人であった。一九六一（昭和三十六）年から六三（同三十八）年までNHKテレビで放映された「チロリン村とくるみの木」で人形遣いを務めたほかは、定職らしいものに全く就かず、また、生涯妻を娶（めと）ることをしなかった。

氷片にふるるがごとくめざめたり思（おも）ひこ
と神にえらばれたるや「わがからんどりえ」

小中はみずから「血液の病氣」だと言っていたが、若い頃から明日の命も知れぬ宿病を抱え、まさに「神にえらばれた」歌人として六十四年の生涯を全うするのである。

● 安東次男との出会い

小中英之は一九三七（昭和十二）年九月十二日、京都府舞鶴市で父英松、母祐子の長男として生まれた。しかし舞鶴に居たのは二歳のときまでで、その後、軍籍にあった父に従って呉（くれ）、佐世保（させほ）、横須賀（よこすか）、東京、久里浜（くりはま）と移転の多い幼年期を過ごした。

一九四四（昭和十九）年秋、北海道稚内（わっかぬい）へ移転。終戦後の四五（同二十）年九月には、日高（ひだか）・沙流郡（さるうぐん）の平取村（現・平取町）に移つ

たが、この地でのアイヌの少年との交遊が歌人としての小中英之に大きな影響を与えることになる。小中は後に、踏の臺、餅草の芽、山みつば、山独活、アイヌねぎ、蕨等の採取方法を教えてくれたアイヌの少年のことを懐かしげに語っている。

小中英之はその後、小樽、釧路、江差と移り住むが、入学した江差高校の社会科教師、石川浩（俳人）宅で詩人安東次男と相まみえる。安東次男は小中英之が死去した翌年の二〇〇二（平成十四）年に亡くなるのだが、小中英之は江差での出会いを始まりとして、亡



小中英之（1975年、37歳）

くなる寸前まで安東次男を「うちの先生、うちの先生」と呼ぶことになるのである。

第一歌集まで

小中英之は一九五八（昭和三十三年）年に文化学院を中退後、六一（同三十六）年に「短歌人」に入会、歌人としてスタートする。ちなみに、その年に刊行された歌集には、岡井隆「土地よ、痛みを負え」、塚本邦雄「水銀傳説」、岸上大作「意志表示」などがある。

小中英之が数多の歌誌の中から「短歌人」を選んだのは、そこに高名な歌人、齋藤史が居たからに違いないのだが、その齋藤史は同年、みずから主宰する歌誌を興し「短歌人」を去っていった。小中は後年、「どの歌誌に自分が居ようとそんなことは大した問題ではない。現在自分が在る場を起点として道を切り開いていくしかないのだ」と語っているが、ずいぶんと衝撃を受けたはずである。

しはつ、電車の紺の座席のひとつねわり春の
山なみ見ゆる町まで

花大根ほどの白さよゆうまぐれ飲みつづ
けいるくすりと意志と

小中英之は、「短歌人」入会から十年間の

作品を習作期の作品だとして歌集に収録していないが、一九九九（平成十一年）年、陸奥の歌人佐藤通雅氏が「小中英之初期歌篇」を編んで、掲出歌のような、とても習作だなどと言って切り捨てることのできない作品群を紹介している。そして、小中が早くから歌の様式や韻律に対して繊細な神経を働かせていたことを教えてくれている。

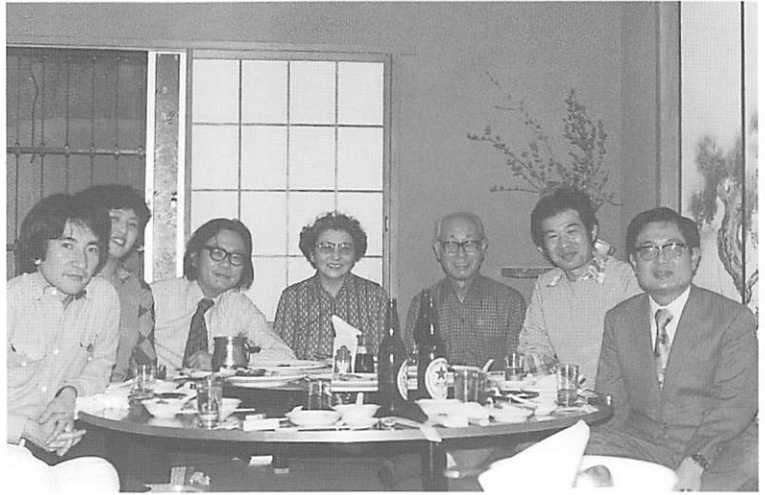
一九七三（昭和四十八）年頃まで小中は、新仮名を使用して作品を詠んでいた。しかし、七一（同四十六）年から七五（同五十）年までの作品を収めた第一歌集「わがからんどりえ」の作品はすべて旧仮名である。その歌集は七九（同五十四）年三月、角川書店の「新鋭歌人叢書」の最後の一冊として発行されたのだが、発行が遅れに遅れたのは、先に紹介した小中の「うちの先生」安東次男の解説文の遅れによるものであった。歌集名の「わがからんどりえ」は、その安東次男の詩画集『CALENDRIER』（フランス語で暦の意味）に因っている。

月射せばすすきみみづく薄光りほほゑみ
のみとなりゆく世界

小海線左右の残雪ここすぎてふたたび逢
ふはわが死者ならむ

小中英之

「短歌人」編集委員会。右から2番目が小中英之（1979年、41歳）。右端は筆者



秋ここに塩山ありて死人花あかしくらし
とさだめがたしも

一首目の歌は、一九九五（平成七）年に出た『現代百人一首』（岡井隆著・朝日新聞社刊）にもとり上げられている名品だが、「すすきみみづく」の解釈がふた通りあるのが面白い。岡井氏は「すすきみみづく」を「すす

き」と「みみづく」のことと解して譲らず、他の人は「すすきみみづく」とは「すすきみみづく」という鬼子母神玩具のことと解して譲らず。そして肝心の小中はといえば、そのどちらにも答えることなくただ微笑んでいるのであった。

小中英之は「何のために歌を作るのか」という安東次男の問いに対して、「鎮魂のため季節のため、それから面白い言葉や地名の一つにもせめて出会いたいためだ」と即座に答えたそうだが、小中のその思いは掲出したこの三首の中に見事に表れているといつてよいであろう。三首目の「死人花」というのは彼岸花のことである。なお、この歌集は「短歌公論処女歌集賞」を受賞している。

小中英之の作歌方法

第二歌集『翼鏡』が出たのは、第一歌集から二年半後の一九八一（昭和五十六）年十月である。この歌集には、七六（同五十一）年から八〇（同五十五）年までの作品が収められているが、小中はその短い「後書」の中で、「この鬱の日月、いくたびも見あげた翼鏡の微妙な陰影に私の精神がささえられたことを記しておきたい。よって翼鏡のゆくへを思い

つつ、題名もそのようにした」と言っている。そのように言われても、私などには辞書的意味（翼鏡＝鳥の翼の風切り羽の部分にあって特別な色彩をもつところ）以上のことは分からないのだが、全くもって小中らしい題名の付け方である。

螢田てふ駅に降りたち一分の間にみたざる虹とあひたり

鶏ねむる村の東西南北にぼあーんぼあーんと桃の花見ゆ

今しばし死までの時間あるごとくこの世にあはれ花の咲く駅

一見、現代に逆行するような小中の短歌作品は、歌集が発行された当時流行った「微視的観念の小世界」という批評用語の恰好の餌にされたのだったが、掲出歌に代表される小中の作品は、今や歴史に残る名歌として多くの人に愛誦されている。

ところで、「微視的」というのが「非常に細かなところまで観察する」という意味だとすると、小中の作品はまさにそのようなものであった。小中は先の一首目の作品がどのようになして生まれたかを次のように語っている。「螢田駅通いが始まった。まず、立春、立夏、立秋、立冬の日は必ず行くことにし、実行し



短歌人新年歌会懇親会で、蒔田さくら子氏と楽しむ小中英之（1988年、50歳）

法がよく窺い知れる言葉であろう。

終わりに

た。また、雨が降った、木枯が吹いた、雪が降った、といつては通った。六月末の、或る日、午後四時過ぎ、ひととき梅雨のぬか雨が晴れた。なかばあきらめてはいたが、もう一度とあって、螢田駅のホームに降り立った私は、思わず声をあげた。狩川のほうの空に虹がかかっていたのである。淡い虹であった。」

これはほんの一例であるが、小中の作歌方

宿痾を抱えてはいたが、小中英之は若い時からとても開放的で、人懐っこい性格の持ち主であった。そしてまた、老若男女いづれに對しても、なかなかめんどろ見がよかつた。私などは、そんな小中に甘えて、その病軀を労るどころか逆に勞られ、鼓舞されるといった有様であった。私の母が入院した時など、小中はいつまでもそれを覚えていて、病状を尋ねてくれたし、一緒に焼き肉屋に入った時などは、ほら焼けてるよ、と言ってお皿に肉をのせてくれるのであつた。小中は歌の才能に恵まれると同時に、己が心のままに人と接し得る才能にも恵まれていた。

そんな小中であつたが、さすがに歌会の時になると違つていた。小中が口をひらくと周囲に緊張感が走り、座の空気が一変した。一字一句をとらえて全霊をこめた批評をしたのである。

小中英之が生前に出した歌集は、『わがからんどりえ』と『翼鏡』の二冊だけである。『翼鏡』を出してから死去するまでの二十年間、小中英之はなぜ歌集を出そうとはしな

つたのか。今となつてはどこまでも謎であるのだが、誰もが抱く疑念であろう。第三歌集はついに遺歌集となつてしまった。

三十歳の若さで「短歌人」の編集委員となり、その美青年ぶりから「短歌人」のプリンストムと呼ばれ、一冊の歌集も持たぬうちに現代歌人協会会員となり、日本文芸家協会会員となり、角川短歌賞選考委員となり、歌人としての地歩を確実に築いてきた小中英之であったが、二〇〇一（平成十三）年十一月二十一日、ついに歸らぬ人となつた。享年六十四。その柩は、みずから作詞した神奈川・大和市立下福田中学校の校歌の流れるなかを送り出された。

死後、〇三（同十五）年三月に発行された遺歌集『過客』には、二十年間の全歌業約二千首が収められている。

芹つむを夢にとどめて黙ふかく疾みつつ
春の過客なるべし

地球儀に白髪ふれて夜明けまで野に咲く
百合をさがしてゐたり

佐佐木幸綱氏はその「解説」の中で、「小中英之は一生を賭けてこの地球規模の巨大な遠景をうたいつづけた」と書いている。

（なかち・としお「短歌人」発行人）